

沙流の動物相とアイヌ文化継承

74

関連シート : 68

コタン(集落)の景観に地域の動物をみる

^{にぶたに}
二風谷アイヌ文化博物館の屋外展示にヘペレセツ(仔グマの寝床:写真1)があります。冬山で行う穴熊猟のときに捕獲したヘペレ(生まれて1年以内の仔グマ)を育て、イヨマンテ(イ=それ、オマンテ=行かせる:飼いグマ送り)に備えるための大切な施設です。また、かつてはタヌキ、キツネといったほ乳類も動物送り儀礼のために育てられたと伝えられています(萱野1978)。

近世～近代の資料を紐解いていくと、さまざまな動物送りの様子を見て取ることが出来ます。^{ぼくり}幕吏近藤重蔵の蝦夷地巡検に同行した医師木村謙次による日誌(木村 1986)には、シマフクロウ(「^{ヤモイチカツフ}鳥島」)と記載、オオワシ? (「^{カバチリ}飛蒼鷹蝦夷名」)と仔グマ(「^{ホリユリ}熊児」)それぞれのカムイを送るイオマンテが、寛政10(1798)年11月にピラカコタン(平賀)で行われたと記されています。また、明治45(1912)年2月にはヌブキ・ペツ・コタン(貫気別)でキツネ送り^{ぬきべつ}と鳥送りが行われたという記録もあります(吉田 1957)。



写真1 二風谷アイヌ文化博物館屋外展示のヘペレセツ(仔グマの寝床:写真左)とブ(高床式倉庫:写真右)。ヘペレセツはイヨマンテに関わる重要施設で、ブはネズミなどの小動物の侵入を防ぐために高床にし、普段ははしごを外していたと伝えられている。こうした施設に地域の動物との関係性や配慮をみることができる

アイヌ口承文芸や古式舞踊にも、アイヌモシリの様々な動物世界が垣間見えます。ヒグマ、エゾシカのほか希少種のフクロウ、絶滅種とみられるオオカミ、カワウソ等の生き生きとした姿が表現されています(久保寺編 1977)。

地域に受け継がれるアイヌ文化継承の姿をみると、多彩な表現のなかに住民と動物の関係性や尊敬の想いをみることができます。

近代における北海道の動物研究

アイヌ文化の動物観を紐解いてい

くには、明治前半代からの科学的な動物研究の成果を合わせみていく必要があります。その中でも、T.W.ブラキストン(1832-1891:写真2)の調査・研究は高い重要性をもっています。

氏は文久3(1863)年の函館居住以降、10数年にわたる鳥類研究を経て、明治16(1883)年2月に東アジア協会の例会で「大陸と日本列島の古代における結びつきを示す動物学上のあらわれ」を発表します。北海道にはヒグマ、シマリス、エゾヤマドリ、シマフクロウ、エゾアカガエル、シベリアオオカミなど、シベリ

資料1 シマフクロウのアイヌ語名(知里 1963)

- (1)kamuycikap(カむイチカブ) 神・鳥 神である鳥《ホロベツ》
- (2)kamuy cikappo(カむイチカッポ) 敬愛する神鳥《ホロベツ》
- (3)kamuy-ekasi(カムイエカシ) 神・翁《ホロベツ;サル》雅語
- (4)kotan-kot-cikap(コタンコッチカブ) 村・所有する・鳥 村を守護する鳥《ビホロ》
- (5)kotan-kox-cikax(コタンコホチカハ)[<kotan-kor-cikap>]《ニイトイ》
- (6)kotan-koro-cikax(コタンコロチカハ)[<kotan-kor-cikap>]《シラウラ》
- (7)kotan-kor-kamuy(コタンコルカムイ) 村・所有する・神 村を守護する神
《ホロベツ;サル;クツシャロ;ビホロ》
- (8)mosir-kor-kamuy(モシリコルカムイ) 国土・を所有する・神《ホロベツ》雅語
- (9)eturus(エトールシ)[<?>]《トンナイ;シラウラ;タラントマリ》
- (10)nyias-kor-kamuy(ニヤシコロカムイ)[<ni-has-kor-kamuy>] 木・条・もつ・神
- (11)ya-un-kontukai
- (12)ya-un-kotchance-gusu

※10～12はJ.バチェラー 1939『アイヌ・英・和辞典』(第4版)による



写真2 T.W.ブラキストンの肖像写真(市立函館博物館蔵)。北海道の動物研究で多くの功績を残した外、明治17(1884)年には平取コタンを含む北海道の調査旅行記をまとめている(ブラキストン著、高倉校訂 1979)

ア大陸系の動物が多い一方で、本州にはキジ、ヤマドリ、カモシカ、イノシシ、トノサマガエル、サルが生息し、津軽海峡が動物分布上の境界線になっているという主張です。

この発表を受けて津軽海峡の動物分布境界線を「ブラキストン・ライン」と呼ぶ提案がなされました。ブラキストン・ラインの設定が世界的な支持を受ける中、その後の八田三郎による提唱(八田ライン:宗谷海峡)も含め、学術的な見地による生物境界線設定が活発に議論され、北海道らしい動物相を解明する発端になっていきました。

シマフクロウについて

ブラキストンの名は、津軽海峡の生物境界線であるブラキストン・ライン及びシマフクロウの学名として、北海道の動物研究史に深く刻まれています。

シマフクロウ(Blakiston's Fish Owl)には「*Ketupa blakistoni blakistoni*」の学名が付けられています。その元となったのはイギリスの大英博物館に収められているシマフクロウの模式標本です。この資料はブラキストンによる採集で、この標本を用いたイギリスの鳥類学者H.シーボームにより*blakistoni*の種小名が献名されました。ブラキストンによる明治前半代の鳥類採集とその目録づくりは、後に行われていくシマフクロウの生態把握と保護活動に繋がる出発点にもなりました。

一方、シマフクロウのアイヌ語は地域や文脈により様々な名称が伝えられています(資料1)。その語

資料2 アイヌ伝承にみられるフクロウ

①^{ふくろう}梟はカムイ・チカプともいってコタン・コル・カムイともいうのだ。梟をコタン・コル・カムイということ、コタン・コル・カムイとしてイナウを上げることは、このコタンにも、昔からの風であるが、その由来はわからない。このコタンではポロ・シリはコタン・コル・カムイのいる処としてイナウ、オミキなどをあげる。(明治44・5・29、ポロ・サル、テコンナウ) (吉田 1957)

②シマフクロウの起源に就いて...「創造者たる神は初に樂園に此を造り暫くして人の園に送り神と人間の仲介者とした。此の故に此の名がある。又彼を名付けて僕と云ふは狩猟の際に人を助けるのみならず鳴聲で人に警告し且健康を助けるからである。彼が人里又は人家に近く来て高聲に叫ぶのは不幸の凶兆で、其の聲の柔らかく且穏なのは繁栄と幸運とを示す吉兆である。」(パチェラー 1925)

③コタンカラカムイ=国造りの神が、国を造り終えて神の国へ帰る前に、天国からフクロウ神を呼び、草とか樹木の種、ヒエやアワなどすべての穀物を預け、村中や国中にまくように言いつけた。種物を預かったフクロウ神は、夜も昼もなく国中を飛び回り、隅々まで種をまいてくれた。そのおかげでアイヌは食べ物に困らない。そのお礼にアイヌはフクロウを大事な神として祭るのであるよ……、と。

※昭和37年10月4日 木村こぬまたんによるウパシクマ「フクロウが神と崇められるわけ」 (萱野 2003)



写真3 シマフクロウの彫刻作品(貝澤守作:エンジュ製)。カムイとして崇められる鳥類である(資料2)一方、北海道における今日の自然保護を象徴する生物でもある



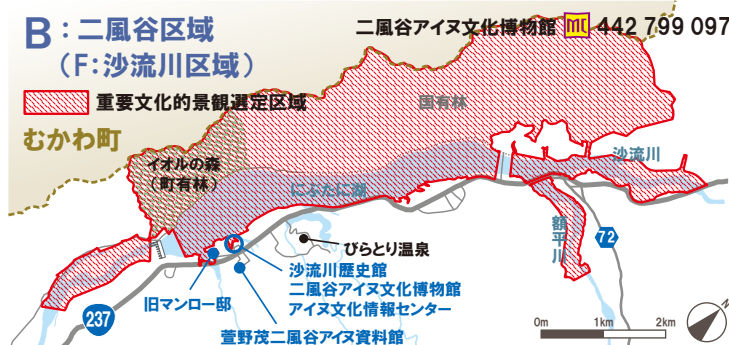
写真4 サパンペ(冠)に彫刻されるシマフクロウの意匠(平取町紫雲古津:個人蔵)。沙流に受け継がれるカムイへの崇拜が、重要な祭祀具の中に表現されている

源や地域のフクロウ信仰(資料2)、シマフクロウの彫刻意匠(写真3・4)等から、地域住民にとって深い畏敬の念をもって接する存在であることが窺えます。

平取地域イオル再生事業と地域の森づくり

平取町ではイオルの森及び国有林(重要文化的景観二風谷区域)、民有林(同三井沙流山林南区域)と連携し、アイヌ文化継承のための植栽・育成補助や針広混合林の保持に配慮した造林業等を行い、沙流川流域ならではの森林保全活動を進めています。

階層構造の複雑な森林植生を目指す取り組みは、沙流川流域のアイヌ文化を育んだ生物の多様性保持にも繋がっていきます。今後、地域振興・教育普及のキーワードとして一層重要性が高まっていくと考えられます。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
発行:2016年7月